



# 「変わる」ということ

学校長  
折川 司

二〇一五年三月の北陸新幹線開業は、金沢を沸き立たせました。「最大五十年間後回し」という冷遇についてはすっかり忘れてしまっています。今は良い気分ですがやき号の雄姿を見つめています。新幹線の開業は、金沢という街をこれから大きく変えていくでしょう。

「良い意味で」開発を後回しにされてきた金沢は、「良い意味で」タコソボ化した街として独自の歩みを続けてきました。荒らされることなく、混じりけのない静かで豊かな時を過ごしてきました。しかし、今後、新幹線が送り込んでくる大量の（都会）は、今まで金沢の街と人と事に眼差しの多くを向けていればよかったです。それ以外に意識を向け、対応していくように強く求めるでしょう。

これは金沢が変容・前進する一大チャンスです。と同時に、「金沢」が失われていく端緒と考えることもできます。例えば、金沢市の統計に拠ると、私たちは年間に約一四〇戸の町屋を滅失させてしまっていますが、そこに代わりて建設されたものが一体何だったのかを考えたことはあるでしょうか。これは進化的なのか、退化的なのか私には判断ができませんが、金沢の街が「東京」の人・物・金に翻弄され、近い将来、どこにもあるような平凡な「地方都市」となってしまうのではないかと、懸念は拭きません。さて、近年「伝統文化」に新しい要素を加味して「進化」させる試みが盛んです。三味線でロックを演奏

したり、宇宙人と闘うという歌舞伎が演じられたり、書道パフォーマンスがテレビ放映されたりと枚挙にいとまが無いほどです。新たな可能性を希求し新しい道を切り拓いていこうとする実験的な姿勢によって、膠着したものの中に、ドラスティックな変化が生じていくというのは確かに刺激的です。

しかし、一方で、それらの一部がもつ奇抜さを痛々しく見ることもあって、これもまたなかなか難しい問題だと感じています。ほんの僅かな隆起のために自身の基礎体力を知らぬ間に失ってしまい、各々の伝統文化が温めてきた本質的な部分が、それらに携わっていないその他大勢の人の目に映らなくなってしまうような気がしているのは私だけでしょうか。年に一度、知り合いの楽器商に誘われて、私は弦楽器の展示会に顔を出しています。ストラディバリやガルネリの名器が並ぶ会場で、三年ほど前だったでしょうか、「美しい音をつくる」とは」という題の小さな講演会が行われていました。

弦楽器は、非常に薄い板を使った箱のようなもので、多くの曲面をもった複雑な形をしています。けれども、そのどこを叩いても振動数が一定でないと伸びのある美しい音は生み出せないそうです。現代にまで残る秀作を生み出した楽器職人たちは、そのことを経験的に知っていて、手と耳の繊細な感覚を頼りに、ある部分は厚く、ある部分は薄く、微妙な調整を積み重ねながら作っていたのだという話でした。

しかしながら、フランス革命以降、弦楽器が庶民に広まっただけにつれて、大量生産を余儀なくされた職人たちは次第に手を抜いていきます。板の厚みを測る便利な道具の発明が、その傾向に拍車を厚めました。そんな中、ストラディバリウスと板の厚みを同じにすれば、見た目だけでなく豊かな音まで再現できるという幻想も生まれ始めます。言うまでもなく、たとえ同種同年の木材を使っても、板一枚一枚、またその部分部分で、硬度もその他の事情も当然違いますからそう単純な話ではありません。惜しいことに、こうした過程で様々な高度な製作技術が失われていきました。

私たちは、便利な日常に浸り、それにもとづいた近視眼的で短絡的な思考しがちです。しかし、私は、この傾向を非難決定しているわけではありません。

ただ、その裏に、消えつつあるもの、さらには既に壊してしまったものが確実に存在していて、それらの中には意外におもしろくて、歴史的・文化的価値があつて、もしかしたらもう復元することなどできないかもしれないものが数多く含まれているということにも、私たちはもう少し敏感になるべきではないかとは感じています。そして、気づいたら次にどうするか。そうしたことを考えてみるこそが、本校が推進しているESDの核心であるような気がしています。